論文

マレー半島ペラにおける華人錫鉱業とシンガポール
―世紀転換期における生産・流通を中心に

東條哲郎

キーワード
錫　華人　マレー半島　シンガポール

はじめに

一八一九年にイギリスの植民地となったシンガポールは、自由貿易港として域内・域外との貿易の結節点となっていった。一九〇〇年の海峡植民地 Straits Settlements[1] 年次報告によると、海峡植民地の総輸出入額は、約五七六、七〇八、〇〇〇ドルであり、そのうち七〇％以上がシンガポールを経由していた [Straits Settlements Annual Report for 1900: 7, 220]。

タイを除く東南アジア各地では、一九世紀後半から二〇世紀初頭、イギリスやフランスなどによる植民地化が進んでいった。植民地化の中で、東南アジア各地では、輸出向け産品の生産量が急増した。一方、一九世紀に入ると、中国南部の福建や広東から多数の華人が移民してきた。七〇年代、ジャンク船に代わり蒸気船が移民の輸送にも利用されるようになり、移動時間が大幅に短縮された。一八七六年の労働調査委員会の報告によると、蒸気船の利用により、中国南部からシンガポールまでの間が六～八日で結ばれる

ようになった [Straits Settlements Legislative Council Proceedings, 1876: cxliii]。華人商人は、増加しつつあった華人移民労働者を雇用して、主要輸出用産品の生産にも重要な役割を果たしていった。

一九世紀半ば以降の錫需要の増大により[2]、従来中国などのアジア向けであったマレー半島産の錫が、「海峡錫 Straits Tin」として欧米向けの第一次産品となり、一八八三年には世界最大の産地となり、一九〇〇年には世界生産の約五〇％を産出していた [Wong 1965: 246-247]。一八八三年の年次報告によると、海峡植民地から輸出入される産品のうち、錫が約一五〇〇万ドルと最大の割合を占めるようになった [Straits Settlements Annual Report for 1883:231]。また、一九〇〇年の海峡植民地の対マレー半島総貿易額は約八〇万ドルであり、海峡植民地の全貿易額の約一四％を占めていた [Straits Settlements Annual Report for 1900: 14-15]。

この地域には歴史的にマレー人が居住しており、マレー人首長が農閑期のマレー人を使って錫採掘を行なっていた [Sullivan 1982: 9, 29]。中でもマレー半島西岸部に位置するペラ Perak は、半島最大の錫生産地域であった [Federated Malay States Annual Report for 1900: 15]。

一九世紀、海峡錫需要が増大すると、海峡植民地に住む華人商人の中から、マレー半島の錫採掘に進出するものが現れた。彼らは、華人移民労働者を雇用し、労働集約的に採掘を行なった。マレー半島では、一九二〇年代末にいたるまで、華人移民労働者を雇用する華人経営の公司が生産の中心を担っていた。

ペラにおける華人錫採掘に関しては、主に錫鉱業史の側面から考察されてきた。そのなかで、世紀転換期は、一九世紀まで全盛であった労働集約的な華人錫採掘から近代的な採掘技術を用いる資本集約的なイギリス資本による採掘への転換期として捉えられ、後者の成功の原因を探ることが主要なテーマとなっている[4]。しかし、イギリス資本など西欧諸国の資本による採掘企業は、一九〇〇年代以降成功し始めたとはいえ、一九一〇年で全産出量の二二％、二〇年で三六％であり、この数値が逆転するのは一九二九年のことである [Yip 1969:164]。

一方、世紀転換期のシンガポール経済については、貿易・金融ネットワークにおけるシンガポールの持つ役割や、そこにおける華人商人の役割についての研究が進んでいる[5]。また、海峡植民地に住む華人と後背地における一次産品生産についての研究も近年進みつつある[6]。しかし、商業活動の中心地とされるシンガポールと、華人による一次産品生産の代表とも言えるマレー半島の錫採掘との関係は十分に

わかっていない。

そこで、本稿では、マレー半島ペラの錫産業を例に、一次産品生産を通じて域内経済の担い手となっていった華人企業家が、世紀転換期における採掘・精錬技術の変化や、金融・資本部門の地域への浸透にどのように対処したのかを分析することを通じ、結節点であるシンガポールと地域経済がどのような関係性を作っていったかを検討したい。報告における史料としては、年次報告や各種報告書などイギリス植民地文書と、同時代に記された文献を主に用いる。

一　一八八〇年代までの状況

ペラは古くから錫産出地域として知られてきた。一八四〇年代、北西沿岸部のラルット Larut で良質な錫鉱床が発見されると、大量の華人がこの地に移住し、錫採鉱床が急増した。一八六〇年代後半から七〇年代初頭、ペナンで発生した華人同士の争いがラルットに波及し、錫採掘を巡る華人同士の利権争いに発展した。これにペラのスルタン Sultan の後継者争いが加わった。当時、海峡植民地 Straits Settlements を植民地化していたイギリスはこれに介入し、[7] ペラは一八七四年イギリスの保護領となった。[8] 治安の回復したラルットからの錫産出量は急増した。

ラルットの錫生産は、華人有力者の経営する鉱床に担われていた。一八八八年、ラルットの一〇人の有力華人の経営する鉱床からは、九二、九七二・三ピクル[9]の錫原鉱が産出されており、ラルット全体産出量[10]の約六〇％を占めていた [Perak Annual Report for 1888: 44]。その中でも最大の鉱床を経営していたのが鄭景貴 Chung Keng Kwee (Chung Ah Kwee, Cheng Ah Kwi) である。鄭景貴は広東省出身の客家である。一八四〇年代にペナンに移住した後、ラルットに進出した。一八六〇年代から七〇年代初頭、ペナンにおいて発生した海山会系と義興会系の結社同士の争いがラルットに波及すると、海山会系の結社の首領として活躍した。一八七四年、ペラがイギリスによる保護領となると、甲必丹 Kapitan に任命され、イギリスによる華人統治に協力した [Wong 1964: 77-80]。一八七〇年代末にこの地域を調査したドイル Doyle, P. は、鄭景貴の経営する鉱床について以下のような記述を残している。

> ペラで最も大きな鉱床はカムンティン Kamunting にあるコン・ロン Kong Loon 公司によって所有されている。同公司は華人有力企業家である甲必丹鄭景貴の下にある。彼はヨーロッパの採掘機械を高く評価しており、それは扱いにくく効率の悪い轉車 Chin Chia にかえて遠心ポンプやエンジンを導入したことからも

明らかである。同鉱床では、全ての鉱床の中で最も多い三〇〇人の労働者を用いている [Dolye 1879: 7]。

カムンティンは、アッサム・クンバン Assam Kumbang、トゥパイ Tupai (Topai) と並ぶラルットの錫採掘中心地域であり、一八八一年、カムンティンでは四四の鉱床で四、三三〇人の労働者が働いていた [de la Crois 1883: 24]。一八八七年、鄭景貴の経営する鉱床は、約三二、〇〇〇ピクルの錫原鉱を産出していた [Perak Government Gazette 1888: 125]。

排水技術を除くと、採掘はほぼ全て人力で行なわれていた。労働集約的な採掘のため、労働者をいかに確保し、賃金をいかに抑えるかが鉱床経営において重要であった。そのためにとられていた方法が、現物前貸しとペナンを通じた労働者リクルートであった。労働者は、鉱床近くに建てられた公司[1]と呼ばれる建物で生活していた。労働者の食事などは公司を通じて提供されており、最低限の生活については保障されていた。決済に必要な労働者の労働日数なども、公司ごとに把握されていた。賃金の計算方法は、日割りなどによって決められ、行港 hang kong と呼ばれる労働者頭を通じて支払われていた。公司では、食事などの必需品の他、アヘンなども前貸しの形で労働者に提供された。公司で提供された品は、労働者ごとに帳簿に記載され、賃金支払いの際に決済された [Doyle 1879: 10-11]。決済は、年に一回ないし二回であり、中国正月（二回の場合は中国正月と陰暦六月）に行なわれていた [de la Croix 1882: 33]。このような決済法は、「現物前貸し制 truck system」と呼ばれ、ラルットではほとんどの鉱床で用いられていた。現物前貸し制やアヘンの販売は、錫鉱床経営者に大きな利益をもたらしていた。

労働者のリクルートにおいては、中国南部から海峡植民地を経由して鉱床に至る、専門のエージェントを介した移民ネットワークが存在していた [Labour Commission 1891: 10-11]。中国南部からペナンに来航した移民は、ペナンの移民エージェントを介してスマトラ島のプランテーションやラルットや南タイの錫鉱床などへと向かっていった。ペナンの有力な華人商人の多くは、これらの地域のプランテーションや錫鉱床に利権を持っており、直接的あるいは間接的に、移民ビジネスにも関与していた。ラルットの錫採掘主は、ペナンの有力な商人を通じて移民エージェントなどとも強い関係を結び、必要な労働者を確保していた。彼らはリクルートに際し、自身の出身地との関係などを利用した。彼らが地縁に基づく郷幇に属し、同郷出身者の保護者として活動していた理由の一つはこれにある。例えば、当時最大の鉱床を経営していた鄭景貴は、広東省出

身の客家を中心とする海山会の頭目であり、広東省増城県出身者を多数雇用していた［山田　1973: 277-278］。労働者のリクルートを仲介するペナンの有力商人は、錫採掘の運転資金の前貸しも行なっていた。前貸し頭家 Towkey Labor と呼ばれる彼らは、錫販売利益を分配する份形式などで、現地で実際に鉱床を経営する華人に資金を提供していた［山田　1973：284-287］。

ラルットで産出された錫は、海峡植民地に住み、しばしば前貸し頭家も兼ねていた錫仲買商を通じて、地理的にも近接しているペナンに輸出されていた。一八八三年の年次報告によると、八二年にペナンに輸入された総額五、一九一、四七五ドルの錫のうち約四八・五％にあたる二、五一七、八七三ドルがペラ及びラルットからの輸入であった。これは南タイからの二、六五二、五九一ドル（五一・一％）とほぼ並び、ペナンで取引される錫のほぼ全てがこの両地域からの錫であった[12]［Straits Settlements Annual Report for 1882: 227］。一方、マレー半島からシンガポールへ輸出される錫は、マラッカを経由して輸入されていた［Straits Settlements Annual Report for 1880: 242］。マラッカに輸出される錫は、マレー半島中南部のルクット Lukut などで産出されたものであり、これらの地域の華人はマラッカに住む商人から前貸しを受けていた［崔 1969: 80］[13]。

このように、ラルットを中心とする一八八〇年代までのペラの華人錫採掘は、資金、労働者リクルート、錫販売において ペナンを結節点としており、シンガポールはほとんど関係していなかったのである。

二　錫精錬・輸送の変化

シンガポールとペラ華人錫採掘の関係は、一八九〇年代における錫流通の面での変化に伴い発生した。そのきっかけとなったのが、海峡貿易会社 Straits Trading Company Limited の精錬部門への進出である。海峡貿易会社は、一八八六年にシンガポールで設立された有限会社である[14]。マレー半島各地から産出される錫原鉱を購入し、自社の精錬所で精錬し、販売することを目的に設立された同社は、設立当初より、錫産出地域への進出を図っていた。

一八八〇年代まで採掘の中心を担っていたラルットでは、既存の華人精錬業者による強い反対があったため進出ができなかった。ラルットでは、鉱床において採掘・選鉱された錫原鉱は、鉱床で精錬されるか、原鉱仲買商を通じてカムンティンなど鉱床近くの町に存在する華人の精錬所で精錬されていた。ラルットでは、南タイのジャン

ク・セイロン Junk Ceylon 島[15]に由来するトンカ炉 Relau Tongka とスマトラ島の東にあるバンカ Bangka 島に由来するバンカ炉 Relau Bangka の二種類の精錬法が主に用いられていた [Wong 1965: 157-158]。精錬された錫は、牛ないし水牛によって引かれる荷車でテルック・カルタン Teluk Kartang まで運ばれ、船に積み替えられてペナンに運ばれた [de la Croix 1882: 61]。

ペラにおける同社の進出は、一八八〇年代半ばの国際的な錫価格の上昇に伴う錫ラッシュによって開発の進んだキンタ Kinta 地域で始まった。キンタは、ペラ川の支流キンタ川流域を中心とする地域である。古くから錫産出地域として知られていたものの、採掘・輸送にかかる費用が高く、採掘は盛んでなかった[16]。錫ラッシュが始まる以前の八一年、採掘中心地の一つであったゴペン Gopeng からペナンまで錫を輸送する場合、ゴペンからキンタ川支流の一つライア Raia 川の船着場プンカラン・バル Pengkalan Bharu までの約一一㎞を象で、プンカラン・バルからキンタ川とペラ川の合流点にある港のドゥリアン・スバタン Durian Sebatang[17]までの約四五㎞を小型帆船 perahu で、ドゥリアン・スバタンからペナンまでを蒸気船で運んでいた [de la Croix 1882: 62-63]。一八八〇年代の錫ラッシュに伴い進出した華人は、ラルットの華人とは異なり、ペナンに基盤を持たない中小の錫採掘経営者がほとんどであった。彼らは、キンタ川流域各地に分散して、小規模に採掘を行ない、短期的な決済を行っていた [Federated Malay States Annual Report for 1903: 10-11]。彼らにとって、このような長距離輸送にかかる経費を支払うことは困難であった。

海峡貿易会社は、八九年にゴペンで支店を設けたのを皮切りに、九〇年にバトゥ・ガジャ Batu Gajah、九一年にラハト Lahat と、キンタ各地に原鉱購買所を設け、周辺で産出された錫原鉱の購入を開始した。そして、一八九二年にはイポー Ipoh にマネージャーを派遣し、キンタ川流域の支店の管轄を行なった [Tregonning nd.: 19]。同社は、錫原鉱を同社に独占的に販売することを条件に、キンタの華人に前貸しを行なうなどの方法をとり、資金面での基盤の薄い新興の華人を中心に徐々にシェアを伸ばしていった [Everitt 1952: 83]。

同社は、キンタ川流域の錫を精錬するため、当初テロック・アンソンに精錬所を建設した。しかし、輸送手段が乏しく、原鉱の集積費や石炭の輸送費が高く経済的でなかったため、これを閉鎖した。テロック・アンソンに代わる場所として選ばれたのがシンガポール沖のブラニ Brani 島である。その理由は、既に港湾設備が整っており、精

錬炉の燃料である石炭を直接荷揚げできるためであった[Tregonning nd.:13-14]。その結果、キンタ川流域の各地で産出された錫原鉱は、蒸気船でブラニ島まで運ばれ、九〇年に同島に建設された精錬所で精錬されるようになった[Tregonning nd.:18]。同社のシェアの拡大について、ペラ州理事官トリーチャー W. Treacher は次のように記している。

キンタから海峡貿易会社の精錬所に原鉱の形で輸出される錫の量は、九〇年には全輸出量四分の一であったが、今年（九一年）は総量の半分以上である。この増加は、精錬錫の輸出に替わって増加したものであり、九一年の精錬錫輸出量は前年より一二、〇〇〇ピクル減少した。同社の活動は、キンタと下ペラ Lower Perak からの貿易をペナンからシンガポールへと転じさせるであろう[19][Perak Government Gazette 1892: 418-419]。

海峡貿易会社のシェアの拡大は、一八九〇年代におけるキンタからの錫原鉱輸出の拡大からも読み取れる。一八八九年まで輸出されたほぼ全ての錫が精錬錫であったキンタでは、九五年には錫原鉱の輸出が精錬錫のそれとほぼ同額となっている。海峡貿易会社による進出は、一九〇〇年代も拡大し、一九一二年には、海峡植民地から輸出された約四八、〇〇〇トンの錫のうち、約四分の三にあたる三六、五〇〇トンを海峡貿易会社が精錬するようになった[Tregonning nd.: 32]。

この動きを促進したのが、近代的な輸送インフラの整備である。ペラにおける鉄道は、一八八五年にタイピンと錫積み出し港であるウェルド Weld 港を結ぶ形で成立した。一八九五年、新たな錫採掘中心地であるキンタ川流域のイポーとテロック・アンソンの間が鉄道で結ばれた。一九〇八年には、キンタの鉱床地域として発展を始めたトロノー Tronoh への支線がイポー＝テロック・アンソン線と結ばれ、鉱床から直接原鉱を運び出すことが可能になった[Chai 1964: 182-183]。また、港湾設備の発達と域内航路における蒸気船の普及により、蒸気船によって原鉱を海峡植民地まで運ぶことが可能となった。

このような海峡貿易会社の進出に対し、ペナンに拠点を持つ華人の中から、近代的な精錬技術の導入により、これに対抗しようとする動きが見られた。その代表といえる人物が李振和 Lee Chin Ho である。一八六三年ペナンに生まれた李振和は、一八八二年よりタイピンにて錫採掘、精錬を開始した。蒸気エンジンなどの近代的な技術の導入に積極的であった彼は、その後キンタ川流域のゴペンに進出して精錬所を開設、ヨーロッパ式の反射炉を導入した。

一八九八年、ペナンにSeng Kee Tin Smelting Worksを設立した。同精錬所は、一九〇七年、西欧資本家と他の華人資本家[20]が出資する東方冶煉有限公司Eastern Smelting Company Limitedとして登記された[Lee & Chow 1997: 85]。同社は、精錬活動が軌道に乗り始めた一九一一年、英国の資本家によって完全に買収された[Everitt 1952: 84-85]。同社の設立に伴い、ペラからペナンに原鉱の形で錫が輸出され始め、一九〇〇年にペラからペナンに輸出された錫のうち、一〇、三五二、三一一ドル相当が精錬錫であり、約五〇、〇〇〇ドル相当が錫原鉱で輸出されていた[Straits Settlements Annual Reports for 1900: 545]。同年、ペラからは、一九四、九八二ピクルの精錬錫と一六〇、六〇七ピクルの錫原鉱、総額二六、〇三二、〇〇〇ドルが輸出されており[Federated Malay States Annual Report for 1900: 28]、ペラから産出される錫の約五九％がペナンに輸出されていた。

ペナンに対するペラ以外からの輸出では、シャム西海岸諸港から三、五八二、五九六ドル相当の精錬錫が輸出された[Straits Settlements Annual Reports for 1900: 545]。一八八二年の貿易額を比較すると、輸入量としては増加しているものの、ペナンに輸入される錫全体では相対的には減少している。一方、一八八二年に全く輸出されていなかったスランゴールから、精錬錫と錫原鉱合わせて五、四〇九、三九九ドル相当が輸出された[Straits Settlements Annual Reports for 1900: 545]。スランゴールでは、同年一一八、〇七六ピクルの精錬錫と一五一、四一四ピクルの錫原鉱がそれぞれ輸出されており、その合計額は一九、四三四、五六二ドルであり、総輸出額の約二八％がペナンに輸出されたことになり[Federated Malay States Annual Report for 1900: 48]、残りの約七二％が、直接ないしマラッカを経由してシンガポールに輸出されていたこととなる。

近代的な精錬がこの時期に急速に広まった理由として、アメリカにおけるブリキ産業の発展があげられる。従来、海峡植民地に輸出された錫は、精錬された後イギリスに輸送され、ブリキに加工された後にアメリカへ輸出されていた。しかし、蒸気船の普及に伴いアジア市場へ進出し始めたアメリカは、東南アジアの錫産地から直接錫を購入するようになり、海峡植民地からアメリカへの精錬錫輸出量は八〇年代後半より徐々に増加し始めた。一九〇〇年、海峡植民地からアメリカへは約一四、〇〇〇トンの錫が輸出されていたが、これは海峡植民地からの総輸出量の約30％を占めていた[Straits Settlements Annual Report for 1900: 597]。そのため、オランダ領東インドのバンカ島な

どとの競争に勝つために、アメリカ市場に好まれる高品質の精錬錫を提供することが必要になったのである。

一九世紀末における精錬技術の近代化と、それに伴う海峡貿易会社の急速なシェアの拡大は、海峡植民地による精錬の一元化をもたらした。その中でシンガポールが中心となっていった。一八九九年には、約三三、〇〇〇トンの錫原鉱がシンガポールに輸入されたが、オランダ領インドからの一、六〇〇トン以外の全ての原鉱はマレー半島から輸入されていた [Straits Settlements Annual Report for 1899: 11]。

三　金融部門の変化

一九〇〇年代、これまでシンガポールを拠点としていた欧系金融資本が、主要錫産出地域であるキンタに支店を設けた。シンガポールで一八五〇年代から金融活動を行なっていたチャータード銀行 Chartered Bank of India, Australia and China が一九〇二年に [Opium Commission 1908, vol2: 744-745]、香港上海銀行 The Hongkong & Shanghai Banking Corporation が一九一〇年にイポーに支店を開設した [Khoo; Abdur Razzaq 2005: 200]。西欧系銀行のキンタ地域への進出は、一九〇〇年代以降のイギリス資本の同地域への進出と関係している。一九世紀を通じ錫採掘部門への進出を目指したヨーロッパ資本の錫採掘会社は、ほぼ全て失敗に終わった。これは、労働集約的な錫採掘において、労働者の確保や労働者への賃金と言う点で華人の経営する鉱床にかなわなかったためである。しかし、一九世紀末になると華人の労働者雇用方法に変化が生じ、ヨーロッパ資本の企業が華人労働者を雇用することが可能となっていた。さらに、優良な鉱床が枯渇し始め、より深い層まで掘り下げていく必要が生じると、近代的な採掘技術の導入が必要となっていった。そのため、一九〇〇年代に入ると、イギリスの錫採掘地域であるコーンウォール地方の資本家がペラの錫採掘に投資を行ない始めた[21]。さらに、一九〇〇年代半ば、ゴム・ブームが発生すると、イギリスの資本家がゴム・プランテーションに投資を開始した。西欧系銀行がキンタに進出を開始したのは、このような投資家に便宜を図るためであると考えられる[22]。

キンタで錫鉱床経営を行なう華人の中で、西欧系銀行の進出に積極的な反応を示す者が出現した。チャータード銀行の出納係 casher 兼買弁 compradore であったリー・チューブン Lee Choo Boon によると、イポー周辺の華人のうち約一、〇〇〇から二、〇〇〇人が錫採掘に利権を持っ

ており、そのうち数十人から一〇〇人程度が同銀行に口座を持っており [Opium Commission 1908, vol2: 744-745]、華人がこのような銀行を利用し始めていたことがわかる。また、二〇世紀にはいると、華人系の銀行がシンガポールを拠点に設立され始めた。一九〇三年、黄亜福 Wong Ah Fuk によって廣益銀行が設立されると、一九一〇年代に華人系の銀行がシンガポールに設立されていった [威爾遜 1975: 9, 23][23]。

このような、シンガポールを中心とした金融資本の進出に積極的に反応した華人の例として、世紀転換期にキンタを代表する華人鉱床経営者となった余東旋 Eu Tong Sen と胡子春 Foo Choo Choon があげられる。余東旋の父余廣 Eu Kong (Eu Kong Pei) は、キンタ川流域に進出を開始した海峡貿易会社に最初に錫原鉱を販売した華人の一人であった [Everitt 1952 : 83]。余廣は、ゴペンで漢方薬の店を経営する傍ら、錫採掘経営を開始し、海峡貿易会社へ原鉱を販売して、採掘に必要な資金を調達した。余廣の息子である余東旋は、一八九〇年代末、父の事業を引き継ぐと、錫採掘に力点を置き、ゴペンやカンパル Kampar を中心に急速に採掘規模を拡大していき、ペラを代表する鉱床経営者となっていった[24]。余東旋は、一九〇〇年代よりシンガポールを拠点に本国への送金事業を開始するなど金融部門にも事業を拡大し、一九二〇年、シンガポールで利華銀行 Lee Wah Bank を設立した [久末 2006: 208, 212]。胡子春は、一八九〇年代後半以降、新興のトロノーを中心に採掘用地を獲得し、鉱床経営を開始した[25]。自身の経営する公司において採掘を拡大する一方、イギリス人投資家の進出に伴い一九〇一年に設立されたトロノー鉱床会社 Tronoh Mines Limited に出資した [Lee; Chow 1997: 42-43]。その結果、一九一五年には、五八五九エーカーの鉱業用地を所有し、五、六〇二人の労働者を雇用する、ペラで最大の鉱床経営者の一人となった [Kinta Land Office, File No. 30/1915]。余東旋や胡子春に代表される大規模な華人鉱床経営者は、水射機やグラベル・ポンプなど、この時期に導入された近代的な採掘技術も積極的に導入していった。

余東旋や胡子春に見られるように、一八九〇年代後半から一九〇〇年代に入ると、錫ラッシュに伴う開発で成功し、キンタにおいて大規模な採掘を行なう者の中から、従来のアヘン専売による利益獲得に依存せず、アヘン吸引に反対する者が現れた[26]。既に述べたように、一八八〇年代までの錫鉱床経営者にとって、アヘン販売は重要な利益獲得手段であった。また、アヘン販売は、一九世紀を通じペラ政府にとって錫関税と並ぶ重要な歳入源であり、政府は、

有力な華人にアヘン専売権を与え、彼らからアヘン販売税を受け取っていた。しかし、国際的なアヘン吸引反対論の展開などに伴い、政府はアヘン政策を転換していった。一八九五年、政府は華人に対するアヘン専売権を廃止し、直接税を課し始めた[Federated Malay States Annual Report for 1896: 15]。これにより、華人鉱床経営者にとって、アヘン販売による利益が減少し、アヘン販売に依存しないような鉱床経営が必要となった。それを示しているのが、一九〇八年のアヘン委員会である。ペラの華人で召喚された者は全部で四人であり、四人ともペラ反アヘン吸引会 Perak Anti Opium Society に属していた。その内、梁碧如 Liang Pi Joo (Leong Fee)、胡子春、余東旋の三名はキンタを代表する大規模鉱床経営者であった[Opium Commission 1908, vol2]。鉱床経営者以外で一九〇八年のアヘン委員会に召喚されたただ一人の華人がチャータード銀行に勤めるリー・チューブンである。このことは、キンタ華人の鉱床経営において、このような近代的な金融資本が重要になってきたことを示している。

チャータード銀行などのペラ進出などに伴い、キンタ北部に位置するイポーが地域拠点となっていった。前述のリー・チューブンによると、カンパルが実際の採掘の中心地であり、イポーが鉱業資本家が集まる都市となり、採掘に関係するビジネスの中心地となった[Opium Commission 1908, vol2: 744]。ペラ商業会議所 Perak Chamber of Commerce などがイポーに建てられ、ペラの鉱床や農園に出資するイギリス資本家の多くがイポーに拠点を持つようになった。余東旋や胡子春のような華人有力採掘主はイポーにオフィスを構えるものも現れた。一九一一年、イポーには一六、三九〇人の華人が居住するようになり、ペラ最大の都市となった[The Census of the Federated Malay States, 1911: 97-98]。

四　結論

一八八〇年代まで、ペラの華人錫採掘は、地理的に近接したペナンと結びついており、シンガポールと殆ど関係を持っていなかった。一八九〇年代に入ると、まず精錬部門においてシンガポールに拠点を持つ海峡貿易会社が新興のキンタ川流域に進出し、従来の精錬錫輸出から錫原鉱輸出へと変化し始めた。これに対し、古くから錫流通に関与していたペナンと強い関係を持つ華人の中に、近代的な精錬技術を導入し、対抗しようとする者が出現した。一九〇〇年代に入り、イギリス資本がペラに本格的に進出すると、これまでシンガポールを中心に活動していたイギリス系銀

行がペラに進出した。また、この時期にはシンガポールを拠点に、華人銀行が成立していった。華人採掘主の中には、このような金融資本を積極的に利用するものが現れた。シンガポール金融とキンタの鉱床地域が結ばれるに伴い、イポーがその結節点として発展し始めた。

即ち、世紀転換期、シンガポール資本が錫生産に資本、物流で関与し、ペラの華人がこれに対応してシンガポールとの関わりを強めた結果、シンガポールを頂点とし、地域を底辺とする錫生産・物流構造を形成していったと言えるのである。

ただし、シンガポールにおける西欧系、華人系資本とペラなどの地域華人企業家との具体的な資本技術関係に関しては不明な点が多い。これを解明するためには銀行の融資先に関する史料などの分析が不可欠であり、今後の課題としたい。

史料と参考文献

1．一次史料

Federated Malay States Annual Reports

General Directory of Straits Settlements and Federated Malay States

Kinta Land Office, File

Perak Annual Report[27]

Perak Government Gazette

Proceedings of the Commission Appointed to Inquire into Matters Relating to the Use of Opium in the Straits Settlements and the Federated Malay States: Vol. I. Report and Annexures, II. List of Witnesses, Evidence, Glossary（本稿では Opium Commission, 1908 と略記）

Report of the Commissioners Appointed to Enquire into the State of Labour in the Straits Settlements and Protected Malay States, 1891

Straits Settlement Legislative Council Proceedings: 1876-1888

2．二次文献

2.1 欧文

Abudur-Razzaq Lubis; Khoo Salma Nasution. 2005. Kinta Valley: Pioneering Malaysia's Modern Development. Ipoh：Perak Academy

Chai Hon-Chan. 1967. *The Development of British Malaya 1896-1909*. K.L.：OUP

Cowan, C. D.. 1961. *Nineteenth-Century Malaya.* London : OUP

Cushman, J. W.. 1991. *Family and State: The Formation of a Sino-Thai Tin-mining Dynasty 1797-1932.* Singapore : OUP

De la Croix, J. Errington. 1881. Some Account of the Mining Districts of Lower Perak. *JSBRAS*, 7 : 1-10

———. 1882. *Les Mines d'etain de Perak.* Paris : Imprimerie Nationale

Doyle, Patrick. 1879. *Tin Mining in Larut.* London : Spon

Drabble, J.H.. 1973. *Rubber in Malaya 1876-1922: The Genesis of the Industry.* KL: Oxford University Press

Fermor, Sir Lewis Leigh. 1939. *Report upon the Mining Industry of Malaya.* KL : FMS Government Press

Francis Loh Kok Wah. 1988. *Beyond the Tin Mines: Coolies, Squatters and New Villagers in the Kinta Valley, Malaysia, c.1880-1980.* Singapore : OUP

Frost, Mark R.. 2005. Emporium in Imperio: Nanyang Networks and the Straits Chinese in Singapore, 1819-1914. *Journal of Southeast Asian Studies*, 36(1) : 29-66

Huff, W.G.. 1994. *The Economic Growth of Singapore: Trade and Development in the Twentieth Century.* Cambridge: Cambridge University Press

Lee Kam Hing; Chow Mun Seong. 1997. *Biographical Dictionary of the Chinese in Malaysia.* Petaling Jaya : Pelanduk Publications

Lian Kwen Fee; Koh Keng We. 2004. Chinese Enterprise in Colonial Malaya: the Case of Eu Tong Sen. *Journal of Southeast Asian Studies*, 35(3) : 415-432

Somers Heidhues, Mary F.. 1992. *Bangka Tin and Mentok Pepper : Chinese settlement on an Indonesian Island.* Singapore : ISIAS

Sullivan, Patrick. 1982. *Social Relations of Dependence in a Malay State: Nineteenth Century Perak.* KL : The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society

Tregonning, K.G.. nd. *Straits Tin: A Brief Account of the First Seventy-Five Years of The Straits Trading Company, Limited. 1887-1962.* Singapore: The Straits Times Press

Trocki, C.A.. 1990. *Opium and Empire: Chinese Society*

in Colonial Singapore 1800-1910. Ithca: Cornell University Press

Wong, C.S.. 1964. *A Gallery of Chinese Kapitans*. Singapore：Government Printing Office

Wong Tai Peng.1994. *The Origin of Chinese Kongsi*. Selangor: Pelanduk Publications

Wong Lin Ken. 1965. *The Malayan Tin Industry to 1914*. Tucson：Univ. of Arizona Press

Wray, Jun L.. 1893. Some Account of the Tin Mines and the Mining Industries of Perak. *Perak Museum Notes*. Taiping：1893

Yip Yat Hoong. 1969. *The Development of the Tin Mining Industry of Malaya*. KL：Univ. of Malaya Press

2.2 邦文

杉原　薫、一九九六．『アジア間貿易の形成と構造』京都：ミネルヴァ書房

武内　房司、二〇〇三．「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』5: 1-33

久末　亮一、二〇〇六．「華僑送金の広域間接続関係―シンガポール・香港・珠江デルタを例に」『東南アジア研究』44-2：204-222

山田　秀雄、一九六五．「イギリス資本とマラヤ経済史」『一橋大学経済研究』16-4：339-351

――――、一九七三．『植民地経済史の諸問題』東京：アジア経済研究所

2.3　中文

崔貴強、一九六九．「十九世紀雪蘭莪華欧錫業成敗之探討」『南洋学報』24-1,2：80-88

丘思東編著、一九八四．『馬来西亜的沙原錫礦工業』吉隆坡：南洋印務有限公司

威爾遜、狄克、一九七二．『安如磐石・華僑銀行四十周年』新嘉坡：華僑銀行有限公司（原著：Wilson, Dick.1972. *Solid as a Rock: The First Forty Years of the Overseas-Chinese Banking Cooperation Ltd. Singapore:* the Overseas-Chinese Banking Cooperation Ltd)

2.4　非公刊

Chow Mun Seong. 1992. *Sejarah Pelombong Timah Cina di Negeri Selangor, 1874-1920*. MA Thesis, Univ. of Malaya

Chuleeporn Pongsupath. 1990. *The Mercantile*

Community of Penang and the Changing Pattern of Trade 1890-1940. PhD Thesis, London University
Everitt, W.E.. 1952. *A History of Mining in Perak*.

註

（1）一八世紀末から一九世紀初頭にイギリスの支配下になったペナン Penang、シンガポール、マラッカ Malacca（ムラカ Melaka）をまとめる形で一八三二年に成立した。当初は東インド会社の管轄下にあったが、その後インド省の管轄下を経て、一八六七年より植民地省下の直轄植民地となった。

（2）産業革命の結果、屋根材や原油ドラムの原料としてのブリキの需要が増大した。特に一八六一年〜六五年の南北戦争の折、缶詰が食料の長期保存と輸送に用いられ、戦後、民間にも普及した。一九世紀中頃までのヨーロッパ錫市場はイギリスのコーンウォール Cornwall産の錫が独占していた。だが、錫需要の高まりとコーンウォール錫の枯渇により、従来中国などのアジア市場向けの商品であったマレー半島の錫が、ヨーロッパ市場の注目を浴びるようになった[Wong Lin Keng 1965: 2-5, 29]。

（3）一九世紀以前にマレー半島から中国清朝に輸出された錫の用途についてははっきりしていない点が多い。武内は、近代雲南の錫業を分析する中で、清朝期において錫は、祭礼用の錫箔や、祭祀用の器、日用の食器として用いられていたとしている[武内 2003: 2-6]。一八八五年にクアラルンプールに移住した錫工ヨン・クン Yong Koonが、当時クアラルンプール周辺から産出されていた錫を用いて華人向けの食器や祭器を製造した[Chen, 2003: 124]ことから、一九世紀後半以降も、この方面での中国向け需要があったと思われる。これ以外の需要としては、青銅砲需要があげられる。

（4）一九世紀後半から二〇世紀初頭の錫鉱業に関する実証的な研究としては、[Wong 1965]、[Yip 1969]、[山田 1973]があげられる。

（5）その例として、[Huff 1994]、[杉原 一九九六]、[Frost 2005]などがあげられる。

（6）その例として、[Trocki 1990]、[Cushman 1991]、[Chuleeporn 1990]などがあげられる。

（7）イギリスは当初内戦には不介入の姿勢を取っていた。介入政策に転換した直接の原因は、海峡植民地知事 Governorによる本国植民地相に対する強い働きかけであるが、その背景には(1)内戦による現地マレー人権力の崩壊、(2)混乱に乗じて他の列強諸国が勢力を伸ばし、中国貿易や軍事拠点であるマラッカ海峡に影響力を増大させることへの懸念があげられる[Cowan 1965: 263-265]。

（8）一八七四年に結ばれたパンコール協約 Pangkor Engagementによると、イギリスはペラに理事官 Residentを派遣し、ペラのマレー人首長であるスルタンに対し、行政・財政などの助言を与えることとなった。これにより、スルタンは名目的な首長となり、ペラは実質的にイギリスの植民地となった[Chai 1967: 6]。なお同年には、スランゴール Selangorが、その後七〇〜八〇年代を通じて現在のヌグ

リ・スンビラン Negri Sembilan全域と、パハン Pahangが理事官制度を受け入れ、マレー半島の錫産出地域が実質的に植民地化した。ペラなどの上記四スルタン国は、九六年マレー連合州 Federated Malay Statesを形成した。

（9）一ピクル pikul=一・六〇kg。

（10）一八九七年までの年次報告などの統計において、錫原鉱一〇〇ピクルから精錬錫六五ピクルが生産されると換算されていた［Federated Malay States Annual Report for 1898: 18］。一八八八年には、ラルットからは一〇二・二八九・三九ピクルの精錬錫が輸出されており［Perak Annual Report for 1888: 12］、同年には約一五七・三六八・二四ピクルの錫原鉱が生産されていたことなる。

（11）公司は、現在では一般に会社を表す語として用いられているが、元来は持株会社、同族の祀堂、鉱床の飯場、同郷などによる幇など多様な意味を持つ福建・広東語起源の語である。東南アジアにおける公司の起源については［Wong 1994］に詳しい。

（12）残りの二一、〇一一ドルはビルマからであった。

（13）マレー半島中部の華人錫採掘とマラッカとの具体的な関係については、今後の課題としたい。

（14）一八八六年シンガポールの経営代理店ブラント Brantsの社員ミューリンハウス H. Muhlinghausがギルフィラン・ウッド Gilfillan Woodの社員ソード J. Swordとともに設立した（設立時の名称はソード・アンド・ミューリンハウス Sword and Muhlinghaus社）。翌年有限会社となり、海峡貿易会社と改称した［Tregonning nd.: 8-16］。

（15）現在のプーケット Phuket島。

（16）一八八〇年代初頭にキンタにおける錫採掘の可能性を調査したフランス人ドゥ・ラ・クルワは、キンタでは当時、マレー人や華人が原始的な方法で分散して小規模に採掘を行っており、新たな鉱床が常時発見されており、もし、それらと主要な河川の間に適切な交通手段が整備され、キンタ川が浚渫されれば、鉱業労働者の大規模な流入のみならず商業的にも期待できるとしている［de la Croix 1881:1-10］。

（17）後のテルック・アンソン Teluk Anson、現在のテルック・インタン Teluk Intan。

（18）マレー、インドネシア海域で広く利用されている平底の小型帆船。

（19）（ ）内は報告者注。

（20）同公司の設立に関わった華人は、南タイで錫採掘を展開していた許如初 Khaw Joo Choe、許如琢 Khaw Joo Tek兄弟、ラルットで採掘を行なった後キンタに進出した鄭大平 Chung Thye Phin、ペナンで錫の仲買を行なっていた林克全 Lim Kek Chuan、スランゴールで錫採掘を行なっている陸秋泰 Loke Chow Thye、ラルットで鉱床を経営していたグ・ブー・ビー Ng Boo Beeであった。［Lee & Chow 1997: 85］。

（21）錫産業に投資を行なっていったイギリス系企業の資本関係や近代的な採掘技術の導入に関しては、［山田 一九六五］、［Yip 1969］などに詳しい。

（22）世紀転換期におけるゴム産業の発展に関しては、［Drabble 1973］などに詳しい。

(23) 一九一二年には華商銀行 The Chinese Commercial Bank、一七年には和豊銀行 The Ho Hong Bank、一九年には華僑銀行 The Overseas-Chinese Bankが設立された。なお、この三行は一九三二年華僑銀行 Overseas-Chinese Banking Corporationに統合された [威爾遜 1975: 9, 23]。これらの銀行は、華人錫産業や、この時期拡大した華人経営のゴム農園への融資を行なったとされるが、具体的にどの位の規模でペラの錫産業に投資していたかは今後の課題である。

(24) 余東旋は反アヘン吸引委員会以外にも、ペラ鉱業会議所 Perak Chamber of Mineの評議員やペラ鉱業・農園業協会 The Perak Mining and Planting Associationの副会長をつとめていた [Singapore directory for the Straits Settlements 1910: 343]。

(25) 胡子春は、余東旋とともに、ペラ鉱業会議所の評議員などを歴任するなど、キンタを代表する華人となっていった。

(26) マレー半島の華人有力鉱床経営者によるアヘン吸引反対運動と、イギリスなどにおけるアヘン反対運動に関しては、今後の課題としたい。

(27) ペラ州年次報告のタイトルは例えば一八八九年の場合 "The Annual Report of the British Resident for the Year 1889"。

（東洋文庫研究員（客員））

Development of Singapore as an International Port City, Focused on the Relationship with Tin Mining Cities in the Malay Peninsula

TOJO, Tetsuo (Researcher, TOYO BUNKO)

From the 19th century on, Singapore has been known as an important port city in Asia. However, scholars have paid little attention to its contribution as an accumulation port in Southeast Asia in the 19th century. This article focuses on the relation between Singapore and Perak, Malay Peninsula. Perak has been knwon as one of the richest regions for tin mining. Until the late 19th century, tin ore, mined in Perak, was transported to Penang, another port city in the Malay Peninsula. But the situation has changed. There are two important reasons, one is the establishment of the steamship and railway system in the area, and the other is the establishment of the modern system for fining tin. With these infrastructures, financial network between Singapore, other main port cities in Southeast Asia and Mainland China was established, and prominent Chinese tin miner expanded their business on this area. This article shows a basic idea on this theme.